

東日本大震災を経験した高校生の震災1年後における 心理プロセスに関する質的研究

喜多見 久美 福島県立須賀川支援学校
中下 富子 埼玉大学教育学部学校保健学講座

キーワード：東日本大震災、高校生、1年後、心理プロセス

1. はじめに

1-1 東日本大震災被害の状況

2011年3月11日午後2時46分、マグニチュード9.0という日本周辺における観測史上最大の地震が東北地方太平洋沖で発生した（東日本大震災）。最大震度は宮城県で観測された震度7で、宮城・福島・栃木・茨城の4県36市町村と仙台市内の1区で震度6強を観測した。この地震により、場所によっては波高10m以上、最大遡上高40.1mにもものぼる大津波が発生し、東北地方と関東地方の太平洋沿岸部に壊滅的な被害をもたらした。2014年12月時点での震災による死者・行方不明者は18,483人、建築物の全壊・半壊は合わせて40万1,566戸¹⁾、ピーク時の避難者は40万人以上、震災直後のライフラインの寸断により、停電世帯は800万戸以上、断水世帯は180万戸以上に上った²⁾。また、交通網も被害を受けたことにより、輸送も不能になり、物資やガソリンの不足により、市民生活に混乱をきたした。震災による直接的な被害額は16兆から25兆円と試算されており、被害が大きかった岩手、宮城、福島の3県の県内総生産の合計に匹敵するほどの大規模災害となった³⁾。

さらに、地震から約1時間後に津波に襲われた東京電力福島第一原子力発電所は、全電源を喪失して原子炉を冷却できなくなり、1号機と3号機で炉心溶融（メルトダウン）が発生した。高温の水蒸気により大量の水素が原子炉建屋内に充満して水素爆発が起き、原子炉建屋が吹き飛び、大量の放射性物質の漏洩を伴う重大な原子力事故に発展した（福島第一原子力発電所事故 以下原発事故）。これにより、広範囲に高い線量の放射能が飛散して、大気土壌及び海洋の放射能汚染が発生し、国際原子力・放射線事象評価尺度（INES）で、チェルノブイリ原子力発電所事故と同様のレベル7という極めて深刻な事態となった。

このため、福島第一原子力発電所がある周辺地域に避難指示が出され、住民は住み慣れた土地を離れ、避難生活を余儀なくされた。その状況は今なお続いており、2014年11月現在県外避難者は45,934人、県内への避難者は75,796人、仮設住宅に24,818人、その他借り上げ住宅や公営住宅等に50,978人が生活している⁴⁾。

さらに県内の他の地域においても、農林水産業の出荷停止や自粛といった第一次産業への打撃は大きく、加えて風評被害や観光への影響、健康への影響に対する不安など、現在においても社会的にも大きな影響を及ぼしている。

特に放射線被爆に関する身体への影響に関して、福島県では県民健康調査を実施しており、震災当時18歳未満の県民を対象に甲状腺検査やホールボディカウンターによる内部被ばく検査などを実施し、将来にわたる県民の健康の維持、増進を図ることを目的として様々な対策がとられ

ている。

1-2 研究の動向

震災による子どもの心理的影響については、阪神・淡路大震災、新潟県中越沖地震における報告があり、大規模震災を経験した子どもに、外傷後ストレス障害(PTSD)、うつ、分離不安障害、解離症状などの様々な精神症状が認められている⁵⁾。1995年に発生した阪神・淡路大震災において被災した人の心理を調べた日下ら⁶⁾によれば、被災した人に恐怖、怒り、無気力感、不安、生き残った者の幸福感と後ろめたさ、被害の少なかった者の後ろめたさ、遺棄感、悲しみ、自責感、開き直りなど、様々な感情が見られたことを明らかにしており、心のケアの必要性が示唆されている。

藤森ら⁷⁾は、子どもの悲嘆は年齢や発達段階によって大きく異なるとし、小学校高学年以降になると、大人の期待に応えようとする気持ちが強く、自分の悩みや心配事を外部に表現する事を躊躇するように思われると述べている。つまり、災害時の心のケアを考える際に、子どもの発達段階に応じた対応が必要となる。また、内見ら⁸⁾によれば、思春期以降では、親への気遣い・周囲への気兼ねから、攻撃性・怒り・悲しみの感情表現とは正反対の否認・感情の抑圧が現われ、特に後悔や自責の念が特徴的であるとしている。そのため、被災時の子どもの心理的反応及び必要とされるケアについて、思春期以降では、感情表出の促進、有能感の回復が必要としている。

原子力発電所事故に関しては、1999年9月30日に発生したJCO社による放射能臨界事故において、事故後1年後でも女子の感情不安定さが有意であること、校種別では高校生が全般的により精神面で強い不安を感じていたことが明らかにされている⁹⁾。

東日本大震災に関しては、本間¹⁰⁾が、宮城県における被災地のメンタルヘルス活動の経験から、東日本大震災が発生して8か月も経つと心のケアは中期的段階に入るものと考えられがちであるが、被災の甚大さや遠隔地という問題に阻まれて復旧は著しく停滞しており、心のケアも大きく遅れているのが実情であると述べ、中期的段階の子どものメンタルヘルスやケアの実態を課題にあげている。さらに藤森¹¹⁾は福島県の被災者の場合は一つ一つがトラウマとなるような災害体験を積み重ねており、今後、重篤な蓄積性トラウマを抱える可能性が高く、被災児童や生徒への心のケアが重要な課題となると述べている。震災による子どもの心理的影響は、様々な精神症状や感情が認められており、発達段階に応じた中長期的なケアが必要となる。また原発事故については、高校生で強い不安を感じていることがあげられており、子どもたちが震災後に示す反応は経時的に変化することから、必要なケアを行うためには、時期に応じて心身の健康状態を的確に把握することが必要である。

文部科学省¹²⁾で実施した非常災害時の子どもの心のケアに関する調査において、PTSDが疑われる症状4項目の一つでも該当する子どもは全体の1割以上に達するとされており、地域別に見た場合、「PTSDが疑われる症状」「PTSDに関連する症状」「一般的な心身不良の症状」のいずれも福島県が最も高く、また、上記3種類の症状のうち、調査時点において継続中のストレスを反映しやすい「一般的な心身不良の症状」が他県より突出して高いことを報告している。この調査から、地震と津波による災害に加え、放射線被害と関連する諸々のストレスが関与している可能性も念頭に置き、今後も引き続き子どもの心の健康状態を慎重に観察し、ケアに当たる必要があると言える。震災後の生活の変化に伴う子ども達の心の状態を見守るために、中長期的なケアのあり方について深化させていくことは極めて重要と考える。

しかしながら、東日本大震災（以下、大震災とした）と原発事故という2つの大きな事故災害に見舞われ、被災した高校生がどのような影響を受けたかについて、生徒が直接その思いを明らかにしたものはほとんど見られない。今後、子どもの心の状況に応じた心のケアや健康支援を行っていくためには、子どもの心理プロセスを明らかにする必要がある。

1-3 研究目的

調査対象校であるX高校は、東京電力福島第一原子力発電所から60Km圏内、福島県中通りに位置する公立高等学校である。9割以上の生徒が進学を希望する進学校である。文武両道を掲げ、部活動も盛んである。

X高校は、大震災により被災し、校舎の2/3が損壊して教室が使用不能となった。学校再開当時は体育館や特別教室等に教室を設営して授業を行い、その後校庭に建設されたプレハブ校舎で授業を行った。学校施設に大きな制約があることに加えて、放射能汚染による外部被爆を避けるための活動制限も余儀なくされ、学校生活全般に大きな支障をきたした。筆者は当該校の養護教諭であり生徒と学校生活を共にする中で、生徒がどのような思いで大震災後の学校生活を過ごしてきたか明らかにする必要があると考えた。

そこで本研究は、東日本大震災を経験した高校生の震災1年後における心理プロセスについて明らかにすることを目的とした。

本研究は、大震災から1年が経過し、日常生活が復旧して精神的に安定してきた時期であること、大震災1年の節目で1年間を想起しやすい時期であること、新学期を迎えるに当たり、今後のビジョンを持ちやすい時期であることを考慮し、生徒の心理プロセスを把握するために適切な時期であると判断し、大震災1年後の状況を調査することとした。

2. 方法

2-1 調査対象

本研究では、福島県の公立X高等学校に在籍する生徒（保健委員を含む）1～2年生 21名を対象とした。主に生徒保健委員としたのは、日常の委員会活動を通し、筆者と関係性ができていること、また、生徒の生活環境や生活の背景も様々であること、生徒間の関係性も固定されたものでなく、調査のことを気にせず、話しやすい雰囲気があることからである。

2-2 調査期間

2012年3月～4月の学年末・学年始め休業中に行った。

調査期間は、大震災（2011.3.11）より1年が経過し、1年間を振り返り、生徒が大震災当時の状況を語れる時期と判断した。また、学年末であることから、1年間のこれまでの生活を振り返るきっかけになる時期であることを考慮した。

学年末・学年始め休業中であり、インタビューをする時間も比較的確保しやすい時期であった。

2-3 調査方法

安梅¹³⁾によるグループインタビュー法を参考に、フォーカス・グループ・インタビュー調査を実施した。日常生活の現実をそのままに、高校生の心理プロセスとその背景・状況を把握するた

めに適していると考え、この手法を用いた。

あらかじめインタビューガイドを作成して質問する項目を設定し、それに基づいてインタビューを行った。

対象者が話しやすいように学年別にグループを分け、それぞれ1時間～1時間30分程度実施し、場所は保健室とした。

インタビュー中は個人名を用いず、それぞれに割り振った番号を用い、1つの質問に対し、右回りで順番に回答した。

- ① 1回目 3月21日 2年生 4名
- ② 2回目 3月21日 1年生 8名
- ③ 3回目 4月6日 1年生 4名
- ④ 4回目 4月6日 2年生 5名

インタビュー内容は、対象者の許可を得てICレコーダーに録音した。また、実施にあたっては、質的研究者1名と大学院生1名とともにいった。

2-4 調査内容

調査内容は、大震災後、体験してきた状況やこの1年間の生活を通して感じてきた思いや考えが明確になるようにした。具体的には、①～⑤のように学校生活や家庭生活でどんな変化があり、どのように感じ、どのように学校生活を送っていききたいかについて、以下のように聞き取りを行った。

- ① 大震災により、家庭生活上で思ったこと、考えたこと
- ② 大震災により、学校生活上で思ったこと、考えたこと
- ③ 現在生活していて、不安に感じること
- ④ 大震災を体験して、今思うこと、考えること
- ⑤ これからの高校生活をどのように送っていきたいと思っているか

2-5 分析方法

分析は、質的記述的研究方法を用いた。質的記述的研究は、研究課題が非常に複雑な出来事やプロセス、あるいは人間の経験であり、注意深い定義や記述が要求されるときに適した研究方法である¹⁴⁾。本研究では、大震災で被災した高校生の複雑な心理状態の動きを明らかにすることを目的としているため、質的記述的研究方法が適していると考えた。

まず、対象者が語ったインタビュー内容について逐語録を作成した。そこから、対象者が語った大震災後の状況や思い、考えが含まれる文脈を抽出し、文脈を損ねたり歪めたりしないようにして、「心理データ」を作成した。次に、「心理データ」から類似した意味内容を集めて分類し、その意味内容を表すサブカテゴリを命名した。そして、サブカテゴリから類似した意味内容を集めて分類し、その意味内容を表すカテゴリを命名した。さらに、カテゴリから類似した意味内容を集めて分類し、その意味内容を表すコアカテゴリを命名し、分類整理した。

また、内容的妥当性を検証するために、分析は質的研究者1名のスーパービジョンを受けながら実施した。さらに、質的研究の経験がある大学院生5名に分析内容を検討してもらった。

また、分析結果については、実態に合っているか、X高校の教諭3名に心理プロセスカテゴリ一覧について確認した。

2-6 倫理的配慮

事前に研究の趣旨を説明し、学校長の許可を得た。対象者には、事前に保健委員会において研究の趣旨、調査内容、プライバシーの保護等個人情報管理保護について説明した。当日対象者についても、同様の説明を口頭で行い、口頭で同意を得た。

また、2008年文部科学省及び厚生労働省の疫学研究に関する倫理指針に基づき、個人情報の保護を遵守し、生徒個人が特定できないように匿名化されたデータをもとに分析を行った。

3. 結果及び考察

3-1 対象者の属性

本研究に同意の得られた21名の生徒（保健委員を含む）の性別は男子7名、女子14名であり、学年の内訳は平成24年3月現在で1年生12名、2年生9名であった。

3-2 大震災後の学校生活の4つの時期（局面）の分類

カテゴリの分類に先だって、対象者の語りをもとに、大震災後学校での生活環境で節目となった時期を4つの局面に分類した。

I期は〔大震災直後～学校再開まで（2011. 3.11～4.11）〕で、大震災が発生し、建物の倒壊、ライフラインの遮断、さらに原発事故など、通常の日常生活が営めなくなった時期とした。

II期は〔学校再開～夏休みまで（2011. 4.11～2011.7.4）〕で、学校が再開し、体育館に仮教室を設営し、通常の学校生活に戻そうとした時期とした。

III期は〔夏休み明け～大震災1年後まで（2011.8.20～2012.3）〕で、プレハブの仮設校舎に移り、通常授業や部活など学校生活を取り戻した時期とした。

IV期は〔大震災1年後以降（2012.3～）〕で、様々な事態が沈静化した時期とした。

3-3 大震災1年後の高校生の心理プロセスとその構造

対象者が語った心理プロセスについて、231件の心理データが抽出された。データ231件は、210サブカテゴリ、59カテゴリ、23コアカテゴリに分類され、さらにI期では9コアカテゴリ、II期では6コアカテゴリ、III期では6コアカテゴリ、IV期では2コアカテゴリに分けられた。

以下にそれを構成する4つの局面ごとに述べる。なお局面を《 》、カテゴリは、コアカテゴリを【 】, カテゴリを〈 〉、サブカテゴリを[]で示した。

大震災と原発事故を経験した高校生の被災直後から1年後までの心理プロセスを明らかにした結果、学校生活環境が変化した節目ごとに、図1のような心理プロセスが明らかとなった。

まず、I期の、【瞬時に喪失した人やものへの悲嘆】では、受け入れ耐え難い現実直面し、深い悲しみがある状況において、II期の生活再建や周囲の覚醒状態の中にあつては、悲嘆は被災生徒の中に潜在化し、表出しにくくなるものの、その後生活が落ち着くIII期に入ると、現実が見えてきて、III期【喪失した人やものへ回顧】として再燃し、悲嘆の回顧につながったと考えられる。

I期【災害に対する不安と恐怖】【放射線被曝に対する不安】からI期【防災意識が高まる】ことで、警戒心も強く、緊張感も高い状態が示された。生活の混乱が沈静化するにつれ、それらの緊張感、警戒感はずりずり軽減されるものの、将来の進路選択や生き方等に漠然とした不安となつて継続されると考えられた。さらにI期【放射線被曝に対する不安】では、I～II期にかけての放

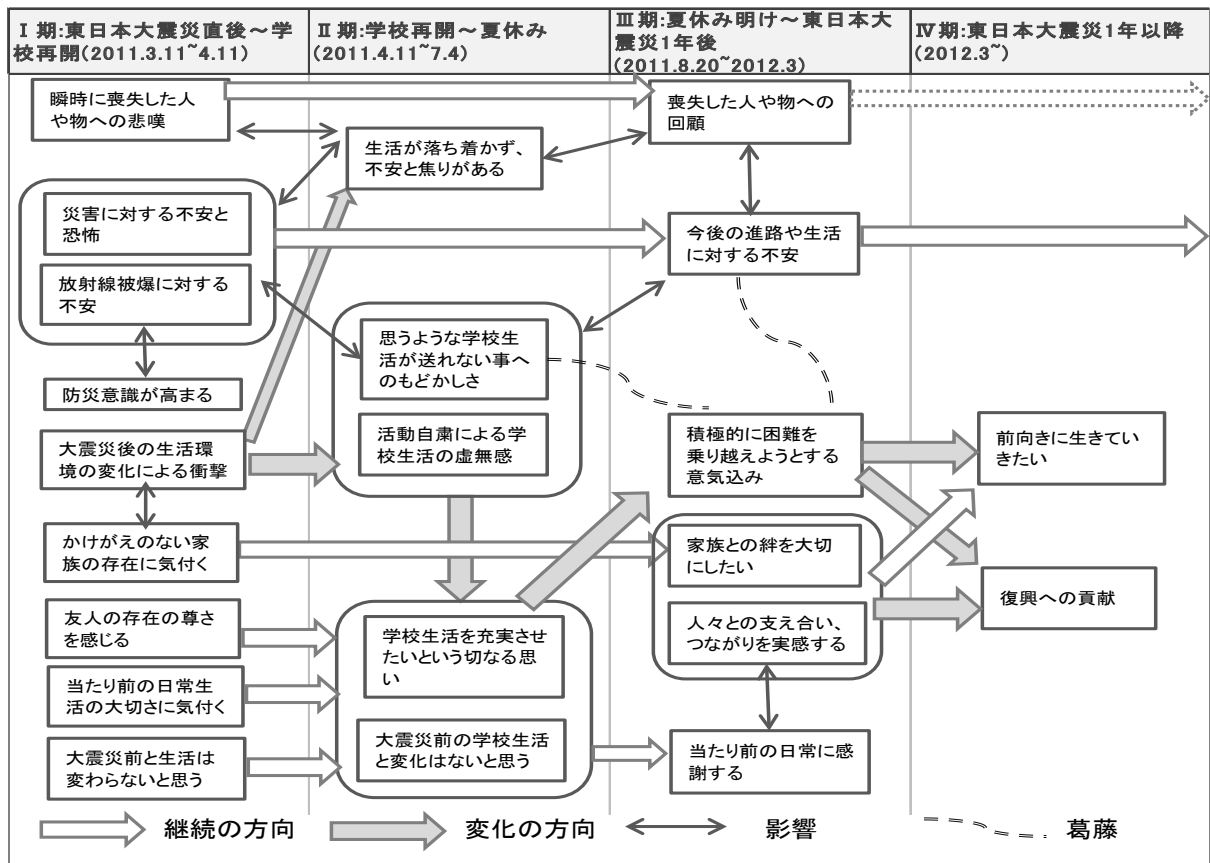


図1 東日本大震災一年後の高校生の心理プロセス

射線の外部被爆・内部被爆から身を守る対策に過敏になっていた。その後、II～III期にかけて、校庭や通学路の除染、食品の放射性物質含有量検査など、ある程度対策が進む一方で、低線量被爆に関する風評被害に関する報道がされるようになり、漠然とした将来の健康に対する不安や差別や風評被害への不安が大きくなっていると考えられた。

I期の【大震災後の生活環境の変化に対する衝撃】では、大震災後に家屋や校舎が損壊したり、ライフラインが寸断して直接生活に影響があり、II期の【生活が落ち着かず、不安と焦りがある】【思うような学校生活を送れないことへのもどかしさ】【活動自粛による虚無感】につながり、学校が再開され、学校生活が落ち着きを取り戻すと、それらは次第に軽減されていったと考えられる。

震災を通して、I期【かけがえのない家族の存在に気付く】ことにより、その後の家族関係による変化が生まれ、III期【家族との絆を大切にしたい】と日頃のかかわりを大切にする姿が示された。同時にI期【当たり前の日常の大切さに気付く】ことで、III期【当たり前の日常に感謝する】意識が高まり、学校生活の充実や将来をIV期【前向きに生きていきたい】思いにつながっていたと考えられる。

同じく震災を通してI期【友人の存在の尊さに気付く】ことでその後のII期【学校生活を充実させたいという切なる思い】につながり、共有体験を通して自己表現にも変化が現れ、親密性、愛着愛他的行動が増し、III期【積極的に困難を乗り越えようとする意気込み】となり、IV期【前向きに生きていきたい】【復興への貢献】というその生き方に影響を及ぼしたと考える。

3-4 大震災後の学校生活の4つの局面ごとの高校生の心理プロセス

大震災と原発事故を経験した高校生の被災直後から1年後までの心理プロセスを、学校生活環境が変化した節目ごとに、以下に述べる。

(1) I期〔大震災直後～学校再開まで（2011. 3.11～4.11）〕

I期のカテゴリを表1に示した。

このカテゴリは、心理データ69件より、59サブカテゴリ、22カテゴリ、【瞬時に喪失した人やものへの悲嘆】、【かけがえのない家族の存在に気付く】、【友人の存在の尊さを感じる】、【災害に対する不安と恐怖】、【放射線被曝に対する不安】、【防災意識が高まる】、【大震災後の生活環境の変化に対する衝撃】、【大震災前と生活は変わらないと思う】、【当たり前の日常生活の大切さに気付く】の9コアカテゴリで構成された。

I期は、大震災が発生し、建物の倒壊、ライフラインの遮断、さらに原発事故など、通常の日常生活が営めなくなった時期である。

【瞬時に喪失した人やものへの悲嘆】では、大震災で一瞬にして〈身近な人が亡くなり、今もつらい〉と深く傷ついている。また、悲惨な被害の状況から〈かけがえのない命を痛感する〉ことで、自然に対する畏怖の念や命の大切さを感じていることであった。

また、【災害に対する不安と恐怖】においては、度重なる〈余震に対する不安と恐怖〉や〈地震で家族が離れ離れになることへの不安〉を感じていた。また、〈津波災害への恐怖〉では実際に津波被害を経験した生徒もいた。人々が極限状態にある中で、〈治安悪化への不安〉も感じていた。

【放射線被曝に対する不安】では、原発事故後、水や食品が放射性物質を含む値が基準値を上回り、〈内部被曝を避けるため、飲料水に気を遣う〉〈内部被曝を避けるため、食料に気を遣う〉など、内部被曝対策を心掛けるようになったり、屋外での空間線量が上昇し、実際に県外へ〈一時自主避難し、外部被曝を恐れる〉〈外部被曝を心配し、外出時の服装に気を遣う〉といった外部被曝から身を守る対策が取られるようになったりしていた。

【防災意識が高まる】では、〈災害は他人事ではない〉という意識が高まり、余震や原発事故に対する様々な備えを考えるようになっていた。被災直後でライフラインも寸断され、避難所で生活する人もいる状況に加え、大きな余震や原発事故等、再び災害が起きるのではないかといった強い危機意識と警戒感、脅威を感じていることであった。

さらに、【大震災後の生活環境の変化に対する衝撃】では、〈大震災前後の生活の変化にとまどう〉を抱えるとともに、〔親戚の家に避難し、肩身の狭い思いをする〕〔住居環境が変わり、家族が離れ離れになりさびしい〕状況があり、〈生活の基盤が変わり落ち着かない〉不安定な気持ちを抱えていた。

そして、当たり前にあると思っていた日常を失い、【当たり前の日常の大切さに気付く】思いを噛みしめていた。

さらに、死と破壊と恐怖の中で生き残ったことへの安堵感から【かけがえのない家族の存在に気付く】、【友人の存在の尊さに気付く】ことであった。また、被害が大きかった地域の状況と比べれば、地域の混乱等はあったものの、被害は少なく【大震災前と変わらないと思う】ことであり、県内被災者への配慮やストレスを低減させ、前向きに考えたいという思いであると考えられる。

つまりI期は、大震災という未曾有の災害を経験し、一瞬にして尊い命が失われ、家屋や建造物が崩壊するのを目の当たりにしたことで、命の尊さや自然の驚異を体感し、大きな衝撃と深い悲しみを感じていることであった。また、余震や二次災害、原発事故など、再び被害が起こるの

表1 東日本大震災1年後の高校生の心理プロセスⅠ期 カテゴリー一覧

コアカテゴリ	カテゴリ	サブカテゴリ
瞬時に喪失した人やものの悲嘆	かけがえのない命を痛感する	命の大切さを感じている、自然界における人間の無力さを感じる等
	死別への悲嘆	身近な人が亡くなり自分の考え方が変わる、身近な人が亡くなり今もつらい等
	喪失への悲嘆と拒絶	被害の悲惨な状況を見るのが怖い、予想もつかなかった出来事を受け止められない、当時の被害の映像は見たくない等
かけがえのない家族の存在に気付く	家族の無事を知り、安堵する	家族に被害がなかったので安心している、安否情報がありがたいと思う
	家族の存在の大きさに気付く	家族の大切さを実感する、家族が離ればなれになることは心細い
	家族の苦勞する姿を見て身につまされる	生活基盤の再建で両親の苦勞が身につまされる
友人の存在の尊さを感じる	友人の無事を知り、安堵する	友人に被害がなかったので安心している
	友人の大切さを感じる	友人の大切さを感じている
	学校の再開が待ち遠しい	通学できない経験をして学校の再開が待ち遠しく思う
災害に対する不安と恐怖	余震に対する不安と恐怖	夜間の災害を考えると一人になるのが不安、外出先で地震が起き帰宅できなくなることが不安である、余震に怯える、大地震を想定すると家屋の倒壊が心配である等
	地震で家族が離れ離れになることへの不安	大地震を想定すると家族と連絡が取れなくなることが不安である、大地震を想定すると離散している家族が心配である
	津波災害への恐怖	津波で死ぬ思いをしたことを思い出す
	治安悪化への不安	物資難から暴動が起きるのではと不安になる
放射線被曝に対する不安	放射線被曝を避けるために気を付ける	内部被曝を避けるため飲料水に気を遣う、一時自主避難し外部被曝を恐れる、外部被曝を心配し外出時の服装に気を遣う等
	放射線被曝に対する不安	内部被曝や外部被曝が気がかりである、余震と被曝に不安を感じる、被曝でいつ死んでも仕方ないと思う
防災意識が高まる	危機意識が高まる	災害は他人事ではないと思う、原発事故による避難を想定する、余震に備え転落防止を考える等 非常時を意識するようになる、非常時に備え備蓄を意識する、非常時に備え家族で連絡方法を話し合う等
	資源やライフラインの大切さを感じる	資源やライフラインの大切さを感じる、節水を意識する、地域の自然や資源を大事にしたいと思う等
大震災後の生活環境の変化による衝撃	生活の基盤が変わり落ち着かない	親戚の家に避難し、肩身の狭い思いをする、住居環境が変わり家族が離れ離れになりさびしい
	大震災前後の生活の変化にとまどう	大震災前後の生活の変化にとまどう、大震災以前の生活と何もかもが一変したと感じる、大震災後の日常生活が復旧せず不安な毎日を過ごす
大震災前と生活は変わらないと思う	大震災後の生活に不便を感じていない	被害が大きい地域に比べれば大変だとは思わない
	特段生活の変化を感じていない	家屋の被害はなかったので生活に変化はないと思う、今の生活は落ち着いているので不安がない、放射線被曝について気にしていない
当たり前の日常生活の大切さに気付く	ごく当たり前に過ごしている日常生活の大切さに気付く	当たり前のものを大事にしたい、当たり前に生活することがありがたい

ではないかという強い恐怖と、非常時に対して危機意識の高まりを感じることであった。さらに、大震災により居住空間、家族関係、地域の環境など、生活環境が一変し、震災後の生活の変化に大きな戸惑いを感じており、当たり前前に生活していただく普通の日常生活のありがたさと、最も身近な家族の存在の大きさをしみじみ感じる事が示された。

(2) II期〔学校再開～夏休みまで (2011. 4.11～2011.7.4)〕

II期のカテゴリを表2に示した。

このカテゴリは、データ50件より、45サブカテゴリ、15カテゴリ、【生活が落ち着かず、不安と焦りがある】、【思うような学校生活を送れないことへのもどかしさ】、【大震災前と変わらぬ学校生活】、【活動自粛による学校生活の虚無感】、【学校生活を充実させたいという切なる思い】の5コアカテゴリで構成された。

II期では、日常生活の危機的な状況も比較的落ち着き、震災から1か月後によりやく学校が再

表2 東日本大震災一年後の高校生の心理プロセスⅡ期 カテゴリー一覧

コアカテゴリ	カテゴリ	サブカテゴリ
生活が落ち着かず、不安と焦りがある	家庭生活が落ち着かず、気持ちが不安定である	避難先でプライバシーがなく気持ちが不安定である、生活基盤が落ち着くまで焦りが続く、家族の中ですれ違う状況を見るのがつらい
	転校による環境の変化に戸惑う	転校による環境の変化に戸惑う
	落ち着かない中で学習を進めることに困難を感じる	自分自身が落ち着かない中で勉強に集中できない
思うような学校生活が送れないことへのもどかしさ	思いきり部活動ができずもどかしい	部活動の練習が思うようにできなくて残念に思う、校外の施設も使用できず部活動の練習場所の確保に苦慮する、部活の練習場所がなくて公式大会に臨んだことが残念等
	学習環境が整わない中で授業を受けるのはつらい	仮設教室を作り過酷な環境の中で授業を受けるのはつらい
	学校再開が遅れ、勉強が遅れが心配である	部活動の練習や授業の出だしが遅れて不安に思う、授業の開始が遅れ受験に対する心配がある
	校舎の損壊で施設が十分に使えなくて不便を感じる	1年間過ごした思い出の校舎がなくなって寂しいと思っている、在学中校舎が使えないことにショックを受ける、校舎がない状況に困惑する等
	例年通りの学校行事ができずにつらい	学校行事が例年通りに開催できず残念に思う、例年どおりの学校生活がほとんどできなくてつらい等
大震災前の学校生活と変化はないと思う	学校生活に不都合を感じない	学校生活に変化を感じない
活動自粛による学校生活の虚無感	外部被爆を心配して、活動を自粛し、不自由さを感じている	通学方法を変更し行動制約に不自由を感じる、外部被爆を心配し部活動を辞めるか悩む
	部活動の自粛により目標を失う	部活動を辞めて目標がなくなった
	部活動の自粛により、友人ときまづさを感じる	震災後部活を辞めて友人と疎遠になる
	放射能の影響で友人との別れを余儀なくされ、悲しい	部活動の部員が辞めていき悲しい、他県に友人が転校し別れがつらい
学校生活を充実させたいという切なる思い	環境の変化に慣れ、学校生活を楽しむ	毎日学校に通うことができることは素晴らしい、過酷な環境下での授業を楽しめたたくましくなったと感じている、新しい学校に慣れ学校生活を楽しむ等 思いやらない体験が貴重な経験だと思う、仮設教室での生活は貴重な体験になり一生忘れないようにしたい、学校環境について周囲から同情されるが自分は不自由と思っていない等
学校生活を充実させたいという切なる思い	友人と一緒に学校生活を送る喜びを感じる	全員無事で友人と笑いあえることが素晴らしい、学校再開後先生や友人と会えて安心する、会えない時間を経験し友人の存在の大きさを実感する等 共同作業をして仲間と仲良くなるのが早くよかった、学びたい気持ちが強まる、身の回りの人々のありがたさを感じる、仲間と同じ経験を共有できることが楽しい等

開された時期である。

【生活が落ち着かず、不安と焦りがある】では、〔避難先でプライバシーがなく、気持ちが不安定である〕〔生活基盤が落ち着くまで焦りが続く〕〔家族の中ですれ違う状況を見るのがつらい〕というように〈家庭生活が落ち着かず、気持ちが不安定である〉こと〈落ち着かない中で学習を進めることに困難を感じる〉ことであった。

自然災害は保護者にとっても強いストレスであり、生活再建にかかる負担も大きい。子どもの心の安定には家庭の安心感が不可欠である¹⁵⁾ことから、家庭との密接な連携と支援も必要と考えられる。

そして、学校が再開されても家庭環境が落ち着かず、大学受験や部活動の大会を控え、不自由な環境が不利になってしまうという焦りがみられ、自己実現に対する欲求がより高いほど、焦りは強く感じていると考えられる。

【思うような学校生活が送れないことへのもどかしさ】では、震災後1か月ぶりに登校し、改めて被害の状況を知り、〈学習環境が整わない中で授業を受けるのはつらい〉〈思いきり部活動がで

きずもどかしい)〈校舎の損壊で施設が十分に使えなくて不便を感じる〉〈例年通りの学校行事ができずにつらい〉といったように、思い描いていた高校生活が送れないことに対する強い憤りと衝撃を感じていた。さらに、〈学校再開が遅れ、勉学の遅れが心配である〉といった焦りを感じていた。

【活動自粛による学校生活の虚無感】では、外部被爆を心配して、〈部活動の自粛により目標を失う〉〈部活動の自粛により、友人と気まずさを感じる〉と大震災後、これまでにはなかった放射能汚染の影響による活動自粛で学校生活の目標や生きがい、親しい友人を失い、大きな虚無感、損失感を抱えていることが明らかとなった。さらに、県内への自主避難が相次ぎ、〈放射能の影響で友人との別れを余儀なくされ、悲しい〉気持ちを抱えていることも明らかとなった。

【学校生活を充実させたいという切なる思い】では、【思うような学校生活を送れないことへのもどかしさ】を感じながらも、〈学習環境の変化に慣れ、学校生活を楽しむ〉〈友人と一緒に学校生活を送る喜びを感じる〉気持ちがあつたことが示された。

Raphael B¹⁶⁾は、死と破壊の脅威の中で生き残ったことの幸福感、損失を認めたくない気持ち、災害によって社会的な障壁が取り除かれたこと、それに共通被災体験による相互連帯感の強まりなども災害後の「ユートピア現象」に寄与するとしており、一種の「ハネムーン状態」がこの時期に存在していたと考えられる。

「校舎はなく、体育館に教室を作るとなったときに、逆にみんなと一緒に作業したことで、仲良くなるのが早かったのでよかったかなって思いました」、「授業も体育館で行うようになって、先生の声を聞き分けることは、最初は大変だったけど、そういうのにも慣れて、逆に2学年全員が一緒に同じ体育館で授業しているということは、楽しいことだなと思えるようになってきた」という語りから、学校再開後の学習環境を整備する中で、友人と学ぶことに喜びを感じるとともに、みんなで困難な状況を体験できたことのうれしさを感じていた。特異な体験を仲間と共有できること、他の人が体験できないことを体験できたことに喜びを感じていたと考えられる。そのような状況の中で、一度きりの高校生活を充実させたいという気持ちが強まり、【学校生活を充実させたいという切なる思い】につながっていったと考えられる。【大震災前の学校生活と変化はないと思う】では、「損失を認めたくない気持ち」が背景にあり、学校に通って学べることの喜びを感じ、通学できることで満足感が得られていることが考えられる。

しかし、藤森ら¹⁷⁾によれば、「ハネムーン期」は多くの愛他的行動が生まれ、人々は一致団結して事にあたり、ほとんど災害後の困難な生活状況に適応したかに見えるが、実際には人々の作業効率は低下しており、被災者たちは、他人を思いやる一方で、自分自身の疲労感については自覚できていない場合が多いと述べている。周囲の大人がこのような状況を観察しながら、頑張りすぎていないか声掛けをし、きめ細やかに対応していくことが必要と考えられる。大きな災害が起きた際、学校再開は子ども達にとって、大きな希望の一つであり、先生との日常通りの会話やスキップは子ども達の不安を軽減し安心感をもたらすといわれている¹⁸⁾ことから、本研究においても、学校再開が果たす役割の大きさが改めて明らかとなった。

つまりⅡ期では、学校再開後、震災で被災した校舎に登校し、今までのように思うような学校生活を送れない状況にもどかしさを感じることであった。さらに、放射能汚染の影響で、屋外活動の自粛があつたり、自主避難で転校していく友人との別れがあつたりと、大きな喪失感と虚無感をかかえていることであった。さらに、学校生活が軌道に乗っても家庭生活が落ち着かず、学習に身が入らなかつたり、強い不安をかかえたりしていることであった。しかし、そのような状況にあつても、過酷な学習環境に適応しながら、普通では体験できない貴重な体験を友人と共有し、

一度きりの高校生活を楽しみ、逆境を乗り越えていこうとする思いが示された。

(3) III期〔夏休み～大震災1年まで（2011.8.20～2012.3）〕

III期のカテゴリを表3に示した。

このカテゴリは、データ84件より、79サブカテゴリ、17カテゴリ、【喪失した人やものへの回顧】、【家族との絆を大切にしたい】、【今後の進路や生活に対する不安】、【人々との絆の大切さを実感する】、【当たり前の日常に感謝する】【積極的に困難を乗り越えようとする意気込み】の6コアカテゴリで構成された。

III期では、新たに仮設校舎が完成し、体育館での仮教室から仮設校舎に移り、ようやく教室での学習が可能となり、平常に近い形での学校生活が送れるようになった時期である。

Raphael B¹⁹⁾は「新聞のトップ記事がその災害の報道でなくなる頃」に幻滅的な現状直視の局面が現れる（幻滅期）としており、災害後の長引く不自由な生活のなかで、倦怠感と無気力感が見られる時期である。物心両面での喪失、個人と社会のライフスタイルの激変、被災前の状態への復帰というそれぞれの現実と直面し、怒りと悲しみ、支援が撤退した後の頼りなさ、こうしたことがみな幻滅的な現実感を募らせるとしている。

III期は一種お祭りのような特異な環境が終わり、平常を取り戻し、現実直視の時期であり、幻滅期の反応が見られた。

【喪失した人やものへの回顧】では、無我夢中で過ごしてきた生活環境が少し落ち着いたところで、〈失ったものへの回顧と絶望感〉〈避難生活による回顧の思い〉〈ようやく吐露できた悲しみ〉がこみ上げ、大震災前の生活を振り返り、深い悲しみを感じていたことが明らかとなった。〈失ったものへの回顧と絶望感〉では、「そういうのを利用して、そういうのどうなのかなって思ったりとか、みんな汚いなと思ったり、特にプラスに思えることはなかった」「逆にそういうふうにならないようにしようとか、思ったりします」と語られ、深い絶望感と拒絶感が示された。また〈避難生活による回顧の思い〉では、原発事故による避難指示で避難生活を余儀なくされている生徒が、〔転校前の学校生活や友人を思い出し、元の生活に戻りたいと思う〕〔震災以前の学校生活や友人を思い出す〕〔離れ離れになった友人に会いたい〕〔避難区域にある家にいつ戻れるのかが気がかりである〕という思いを抱えていることが示された。小此木²⁰⁾は、対象の喪失には、分類近親者の死や失恋をはじめとする愛情・依存の対象や死の別離、住み慣れた環境や地位、役割、故郷などからの別れ、自分の誇りや理想、所有物の意味をもつような喪失と大きく3つに分類しているが、富永²¹⁾は、これらに加え、原発事故や津波による家族の行方不明は、あいまいな喪失をもたらしていると述べている。あいまいな喪失には2つのタイプがあり、Type1は「心理的には存在しているが身体的物理的には存在しない状況で、さよならのない別れ（Leaving without Goodbye）であり、Type2は「身体的物理的には存在しているが心理的には存在しない状況で、別れのないさよなら（Goodbye without Leaving）」である。あいまいな喪失は「あるがない」「いないがいる」という葛藤を引き起こし、それは、個人の中だけでなく、家族、コミュニティを心理的に分断してしまうと述べている。

原発事故による喪失感、計り知れないものがあり、そのような喪失感を抱えた状況において、II期の生活再建や周囲の覚醒状態の中にあつては、悲嘆は被災生徒の中に潜在化し、ますます表出しにくくなるものの、その後生活が落ち着くIII期に入ると、現実が見えてきて、【喪失した人やものへの回顧】として、再燃し、よりあいまいな喪失と心理的葛藤をもたらしていたと考えられる。原発事故による避難生活はさらに長期化が予想され、そうした喪失感を抱えた子どもたちの支援

について、今後さらに検討していくことが必要であるとする。また、生徒が体験した状況や心的状況によって受け止め方が異なり、安²²⁾は子どもの「心の傷」による症状は大人のそれ以上に見逃されやすく、症状になって現れるとは限らないし、小さな徴候は見逃されることも多い。子供の行動や感情のうつろいやすく、子どもの「心の傷」による症状は大人のそれ以上に見逃されやすいと述べており、日常が回復した段階においても日常の健康観察を行っていくことが必要であるとする。

【今後の進路や生活に対する不安】では、まず〈進路選択についての葛藤〉では、〔震災で父親の仕事が影響を受け、経済状況が厳しいため、進学に不安がある〕〔震災により、経済状況が厳しくなり、進学できるか心配である〕〔進学により、経済的に負担をかけるので、親に申し訳ない〕といった経済的な困難さが認められた。また、〈大地震を想定すると、進路決定にとまどいがある〉〈災害が起きそうな場所へは行きたくない〉〈被爆の影響を考慮し、地元か県外か進路について悩む〉〈自分の進路の決定が現実的に迫られ、決められなくて焦りがある〉といった高校生が直面する進路選択について、大震災の影響が示された。

さらに、〈放射線被爆による風評被害で、今後差別されるのではないかと不安に思う〉では、〔放射線被爆による風評被害を心配する〕〔放射線被爆について同情されることに気分を害している〕〔風評被害で今後周囲から差別されるのではないかと不安に思う〕〔将来、結婚に不安がある〕など、「放射能ですけど、ニュースでもやっているように風評被害とか問題になっていて、将来県外の大学に行っているとしたら、県外の人から風評被害をうけるのではないかという不安を常々感じています」「将来、結婚とか子どもを持つたりするときにいろいろあるのかなと思います」という不安を抱えていた。

そして、〈放射線被爆による今後の健康被害が心配である〉と不安を抱えており、「将来のことを考えると、自分が子どもとか産んだときに、子どもに影響したりしないかなってことを考えると、福島県のひとは少し不安が強いのかなと思います」といった次世代への影響に対する不安も示された。秋坂ら²³⁾は、放射能臨界事故後の不安について、思春期女子の感情不安定性が目立つとしており、本調査においても、特に女子から結婚や出産についての不安が語られていることから、女子においては病気のリスクに加え、結婚、出産についての不安を今後もより強く抱えていくことが考えられる。

【家族の絆を大切にしたい】では、〈家族が離散し、心身ともに生活に困難を感じる〉〔家族が自主避難し、離散しているので、家事を任されて大変だ〕と感じるとともに、会えない寂しさと早く一緒に生活したいという思いが示された。平成24年4月1日現在の18歳未満の子どもの県外への避難者数は17,895人²⁴⁾とされ、平成26年10月1日現在では12,436人だったのに比べ、減少傾向にはあるものの、依然として一家転住を含め、母子避難等で離散している家族が今後も続くことが予想される。

そして、〈家族の大切さが分かり、より積極的にかかわろうとする思い〉では、「家族との関わり合いとか、いつ地震が来ても後悔しないようにコミュニケーションとかを大切にするのが大事なんだということを学んで」「毎日一緒に朝食を食べたりする習慣を持つことは大事だと思いました」と、何気ない日々の家族とのコミュニケーションの大切さを感じていた。

【人々との支え合い、つながりを実感する】では、多くの支援を受けたり、新たな出会いがあったりしたことで、人々の支えに感謝し、〈多くの人々との支えあい、つながりに感動する〉〈人との関わりを大切にしたい〉という思いが示された。さらに、自らがボランティアを体験することで、

表3 東日本大震災一年後の高校生の心理プロセスⅢ期 カテゴリ一覧

コアカテゴリ	カテゴリ	サブカテゴリ
喪失した人やものへの回顧	失ったものへの回顧と絶望感	物事をプラスに感じることはない、人間の醜さを知り失望する、人間の裏表を反面教師として捉えている
	避難生活による回顧の思い	転校前の学校生活や友人を思い出し元の生活に戻りたいと思う、震災以前の学校生活や友人を思い出す、避難区域にある家にいつ戻れるのかが気がかりである等
	ようやく吐露できた悲しみ	涙もなく涙が止まらない
家族との絆を大切にしたい	家族が離散し、心身ともに生活に困難を感じる	家族が自主避難・離散しているので家事を任されていて大変だ、離散した家族が会することがないのでさびしい、離散しているので家族に相談したいときに相談できなくてつらい等
	家族の大切さが分かり、より積極的にかかわろうとする思い	家族の役割の大きさを実感する、家族とのコミュニケーションの大切さを感じる、家族一緒に食事をすることの大事さを感じる等 家族や友人との何気ない会話が大事だと思う、困難な状況を家族で乗り越えることは楽しい、友達や家族の大切さが分かる、家族と一緒に生活したい等
今後の進路や生活に対する不安	進路選択についての葛藤	震災で父親の仕事が影響を受け経済状況が厳しいため、進学に不安がある、進学により経済的に負担をかけるので親に申し訳ない等 大地震を想定すると進路決定にとまどいがある、被爆の影響を考慮し地元か県外か進路について悩む、自分の進路の決定が現実には迫られ決められなくて焦りがある等
	放射線被爆による風評被害で、今後差別されるのではないかと不安に思う	放射線被爆による風評被害を心配する、放射線被爆について同情されることに気分を害している、将来結婚に不安がある
	放射線被爆による今後の健康被害が心配である	被爆についての情報を聞くと不安になる、将来被爆で自分の子どもに影響がないか不安を感じる、被爆の影響を考慮し地元に住むことに不安を感じる等 低線量被爆の安全性について疑問を抱く、低線量被爆による今後の健康被害が心配である、低線量被爆の実験台と見られるのは悲しい等
人々との絆の大切さを実感する	多くの人々との支えあい、つながりに感動する	みんなで力を合わせれば乗り越えられると思う、ボランティアを経験し人の役に立つ喜びを知る、人との繋がりがあれば助け合えると思う等 物的・人的援助を受けて人と人との絆の大切さを感じている、被災地を励ますメッセージに感動する、新たな出会いに感謝する等
	地域の良さを再確認し、愛着がわく	あらゆる年代の地域の人との出会いを大切に思う、地域で互いにルールを守って生活しており礼儀正しさを感じる等 地域により親しみや良さを感じる、地域や周囲の人々とのつながりを感じている、震災体験をもとに地元ならではのつながりを大事にして生活したい等
	人との関わりを大切にしたい	人との関わりを大切に生きていきたい、人間関係の大切さを感じコミュニケーションをとるようにしている
当たり前の日常に感謝する	ごく当たり前に過ごしている日常生活の大切さを知る	ごく当たり前の生活ができれば十分と思う、当たり前で生活することがありがたい、小さなことに感謝して生きていきたい等
	学習に専念できる環境に感謝する	学校で勉強することは当たり前ではなくありがたい、学習できる環境に感謝する、感謝の気持ちを持ちながら勉強に励みたい
積極的に困難を乗り越えようとする意気込み	学校生活に適応し、不自由を感じない	仮設校舎は不都合があるが快適に感じる、仮設校舎での生活は楽しい思い出になりよかった
	自分たちの力で学校生活を充実させようという意気込み	一時は部活動の練習場所もなく心配したが元のように活動できて安心する、中止となった生徒会行事を実現できるように活動する、行事を通して震災後入学した1年生に高校のよさを感じて欲しい等
	情報を見極めていく重要性を知る	国の動向や情報に関心を持つ、情報の中から、真実を見極めていく重要性を感じる
	何があっても乗り越えたいと思う強い気持ち	被災者が特別だと思わないで他の高校生と同じ普通の高校生活を精一杯送りたい、仮設校舎という逆境にもめげず悔いのない高校生活を送りたい、逆境に強くなっているので今まで以上に勉強を頑張りたい等

役に立つ喜びも感じていた。ボランティアは、青年期に特徴的である一人の人間として社会に役に立ちたいという願いを具体的かなえてくれ、社会の役に立つと同時に、自己自身の充実感や達成感を味わうことができる。また、結果として様々な人と出会いがあり、人間は自分一人で生きているのではなく、人間はかかわり合っていることが実感できる²⁵⁾。

また、災害がもたらすストレス状態への支援とは、生活の秩序と連続性を取り戻すこと、つまり、できるだけ早く日常生活を回復していくこと、安全な場所を回復すること、そして「自己効力感」を持てるようにすることが重要であるとされている²⁶⁾。本研究においても、〈地域の良さを再確認し、愛着がわく〉では、〔地域で互いにルールを守って生活しており、礼儀正しさを感じる〕ことで、〔地域により親しみや良さをを感じる〕とともに、同じ境遇を共有したことで、〔震災体験をもとに、地元ならではのつながりを大事にして生活したい〕という思いであったと考えられる。

【当たり前の日常に感謝する】では、震災当時の非常時を経験し、〈ごく当たり前に過ごしている日常生活の大切さを知る〉〈学習に専念できる環境に感謝する〉思いで、いつもの日常生活を過ごしていることに感謝しながら、謙虚に勉学に励む姿がみられた。

【積極的に困難を乗り越えようとする意気込み】では、体育館から仮設校舎に移り、教室で落ち着いた環境の中で授業を受けられるようになったことで、〈学校生活に適応し、不自由を感じない〉という適応性と、ようやく学校生活が平常に戻るにつれ、〈自分たちの力で学校生活を充実させようという意気込み〉が高まり、〈何があっても乗り越えたいと思う強い気持ち〉で力をあわせて学校行事を実施するなど、生徒自らがより積極的、主体的に活動していく姿がみられた。また、〈情報を見極めていく重要性を知る〉ことで、社会的な関心の高まりも認められた。Raphael B²⁷⁾は、たとえ、痛々しい傷が残ろうとも、難局を乗り切ったことから新たに大きな力と英知が生まれることもありうると述べており、本研究の心理プロセスにもあてはまると考える。

つまりⅢ期は、大震災後の生活の混乱が落ち着き、平常に戻りつつある中で、喪失した人やものへの回顧と絶望感や今後の進路や生活に対する不安があることであった。また、家族とのコミュニケーションを大切にしようとする思い、地域への愛着と人々との繋がり、国内外の多くの人びとの支え合いに感謝するとともに、人と人との絆の大切さを感じていた。また、当たり前の日常に感謝し、ささやかな幸せを大切にしたいという思いであった。さらに、みんなで力を合わせ、自分たちの力で震災や原発事故による困難を積極的に乗り越えようとする意気込みが示された。

(4) IV期〔大震災1年以降(2012.3～)〕

IV期のカテゴリを表4に表した。

このカテゴリは、データ29件より、28サブカテゴリ、4カテゴリ、【前向きに生きていきたい】、【復興へ貢献したい】の2コアカテゴリで構成された。

IV期は、様々な事態が沈静化した時期である。

【前向きに生きていきたい】では、様々な困難を仲間と力を合わせて乗り越えてきたことが大きな自信となり、〈今を充実させて生きていこうとする思い〉〈前向きに生きていこうとする思い〉であった。【復興への貢献】では、大震災から立ち上がろうとする地域の人々の姿を通して、地域の愛着を強く感じ、〈次世代に引き継いでいきたいという思い〉と〈復興に貢献したいという思い〉であった。

Tedeschi & Calhoun²⁸⁾が災害後の被災者のトラウマ後にポジティブな変化を示す被災者の姿から、自己における変化、他者との関係性における変化、人生哲学の変化という心的外傷後成長(PTG)の特徴を明らかにしている。尾崎²⁹⁾によれば、PTGは痛みやネガティブ感情を含み、脆弱性の認

表4 東日本大震災一年後の高校生の心理プロセスⅣ期 カテゴリー一覧

コアカテゴリ	カテゴリ	サブカテゴリ
前向きに生きていきたい	今を充実させて生きていこうとする思い	被爆を想定して後悔しないよう今を充実させて生きていきたい、周囲から同情されなくらい楽しく生活したい、特別でなく普通に生活したい等
		進路実現に向けて頑張りたい、感謝の気持ちを忘れず、今自分がやるべきことを精一杯やる等
	前向きに生きていこうとする思い	一層ポジティブに考えられるようになった、震災後はさらに明るく前向きに生きていきたい、大変な状況を乗り越え、自信を持つ等
		自分の進路をしっかりと考えたい、一度しかない人生なので本当にやりたいことを見つけたい、自分を見つめなおすきっかけとなる等
復興への貢献	次世代に引き継いでいきたいという思い	震災を忘れず次世代に引き継いで生きていきたい、被災者にしか分からない感覚や物の見方を大事にしたい
	復興に貢献したいという思い	地域の子どものために働きたい、将来地元で貢献できる仕事に就きたい、将来復興に役に立つ学問を学んでいきたい等
		日本の将来を真剣に考えることが出来る大人になりたい、一生懸命勉強して社会に貢献できる仕事に就きたい、社会に貢献したい気持ちが強まる等

識から帰結する明け渡しを特徴とし、感謝を中心としたポジティブ感情も心的外傷後の成長の中心としており、危機的環境の中で、自己表現にも変化が現れ、親密性が増し、人への興味、愛着、同情、愛他的行動が増し、つながりが強くなることを報告している。物理的な環境や社会的な環境とのつながりだけでなく、自らの弱さも認め、他者に助けを求め、そこから人々とのつながりに気づき、これまでの考え方や生き方を転換して、今を充実させ前向きに生きていこうとする思いであったと考えられる。

つまりⅣ期では、大震災体験を糧として、人とのつながりや困難の克服が大きな自信となり、ささやかなことに感謝しながら今を充実させ、前向きに生きていこうとする思いが明らかとなった。自らの被災体験が、これから生きていくうえでの決意につながり、進路へ大きく影響を及ぼし、将来、復興に貢献したいという今後の抱負や展望が示された。

3-5 研究の限界と今後の課題

本研究は、福島県内の高等学校1校の一部の生徒を対象にしており、限定された対象であることが、本研究の限界である。また、1年後のアニバーサリー反応にも極力配慮しながら調査を行ったため、個人的な被害状況の把握や詳しい聞き取りも実施しておらず、被害の程度に応じた心的影響には触れていない。

さらに、本研究は大震災1年後の高校生の心理プロセスとしているが、すでに大震災から間もなく4年目を迎えるにあたり、子ども達を取り巻く環境や課題はさらに多様化・多層化しており、新たな課題も生じている。

今後、復興の状況や新たな課題も踏まえ、長期的視野に立った子ども達の心身の状況の把握と、その状況に応じた適切な支援ができるよう検討を進めていく必要があると考える。

4. 結論

本研究において、高校生を対象としたフォーカス・グループ・インタビューにより、大震災を経験した高校生の震災1年後における心理プロセスについて以下のような知見が得られた。

インタビュー調査での語りをもとに、大震災後生活環境で節目となった4つの局面が見出された。

I期〔大震災直後～学校再開まで（2011. 3.11～4.11）〕は大災害の甚大な被害を目の当たりにし、喪失による大きな悲嘆と拒絶、自然に対する畏怖の念や命の大切さ、さらに災害に対する強い危機意識と警戒感、脅威を感じ、日常生活の混乱による不安定な気持ちである。その中で、家族や友人のかけがえのなさ、当たり前前日常の大切さに気付いていく時期である。

II期〔学校再開～夏休みまで（2011. 4.11～2011.7.4）〕は学校生活が再開したものの、思い通りの学校生活が送れないことへの強い憤りと衝撃、活動自粛等による大きな虚無感、損失感を抱えながらも、友人との再会を喜び、過酷で特異な環境を仲間と共有しながら学校生活を充実させたいと立ち向かう時期である。

III期〔夏休み明け～大震災1年まで（2011.8.20～2012.3）〕は、大震災後の生活の混乱が沈静化し、平常に戻りつつある中で、喪失への回顧による深い悲しみ、今後の進路や将来の健康に対する不安がある。また、多くの人々との絆やつながりを大切にして、積極的に困難を乗り越えようと意気込んでいる時期である。

IV期〔大震災1年以降（2012.3～）〕は、震災体験を糧に人との繋がりや困難の克服を自信とし、ささやかなことに感謝しながら今を充実させて、前向きに生きていこうとする時期である。

引用文献

- 1) 警察庁：東日本大震災について 被害状況と警察措置（2014.12.10）
<https://www.npa.go.jp/archive/keibi/biki/higaijokyo.pdf>
Accessed December 26 2014
- 2) 厚生労働省：平成23年（2011年）東北地方太平洋沖地震の被害状況及び対応について（第17報）2011.3.16
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000015344.html>
Accessed December 26 2014
- 3) 内閣府：月例経済報告等に関する関係閣僚会議 震災対応特別会合資料 2011.3.23
<http://www5.cao.go.jp/keizai/bousai/pdf/keizaitekieikyoku.pdf>
Accessed December 26 2014
- 4) 福島県：平成23年東北地方太平洋沖地震による被害状況速報 第1342報 平成26年12月26日現在
<https://www.pref.fukushima.lg.jp/site/portal/shinsai-higaijokyo.html>
Accessed December 28 2014
- 5) 上野昌江他：阪神大震災後の小学生の心身の様子と保健室の取り組み，大阪府看護大学紀要，（1341-0989），2巻，第1号，41-49，1996.03
- 6) 日下菜穂子他：災害後の心理的变化と対処方法—阪神淡路大震災6カ月後の調査—，教育心理学研究，45，51-61，1997.03
- 7) 藤森和美他：北海道南西沖地震を体験した子どもの精神健康，精神療法，22(1)，30-40，1997

- 8) 内見紘子他：被災時の子どもの心理反応及び必要とされるケア—『心のケア4原則』の検討を含めて—, 大阪市立大学看護学雑誌, 第6巻, 35-46, 2010.03
- 9) 秋坂真史他：放射能臨界事故による学校児童生徒の心的外傷後症状に関する研究, 日本心身医学会, 第45巻, 第8号, 607-615, 2005.08
- 10) 本間博彰：東日本大震災と子どもの心のケアについて (報告), 児童青年精神医学とその近接領域, 53(2), 2012
- 11) 藤森立男・矢守克也：復興と支援の災害心理学—大震災から何を学ぶか—, 15, 福村出版, 2012.7.10
- 12) 文部科学省：平成24年度非常時の子どもの心のケアに関する調査報告書, 1-5, 2013.7
- 13) 安梅勅江：ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法 科学的根拠に基づく質的研究法の展開, 1, 第1版第6刷, 医歯薬出版株式会社, 2011
- 14) グレック美鈴他：よくわかる質的研究の進め方・まとめかた 看護研究のエキスパートをめざして, 第1版第6刷, 医歯薬出版株式会社, 54-57, 2013
- 15) 清水將之他：災害と子どものこころ, 22-29, 集英社新書, 2012
- 16) Raphael B：災害の襲うとき カタストロフィの精神医学, 19-22, 新装版3刷, みすず書房, 2004, 11
- 17) 前掲書11), 34-35
- 18) 辻尚子：自然災害後の学校現場における子どもへの心のケア—阪神・淡路大震災から11年経過して— 武庫川女子大学発達臨床心理学研究所紀要 (9) 105-114 2007-12
- 19) 前掲書16), 73-76
- 20) 小此木啓吾：対象喪失—悲しむということ, 12-15, 中公新書, 1979
- 21) 富永良喜：災害・事件後の子どもの心理支援—システムの構築と実践の指針, 10, 創元社, 2014.3.10
- 22) 安克昌：増補改訂版 心の傷を癒すということ—大災害精神医療の臨床報告, 216, 作品社, 2011.6.10
- 23) 前掲9)
- 24) 福島県：平成23年東北地方太平洋沖地震による被害状況速報 第1342報 平成26年12月26日現在 <https://www.pref.fukushima.lg.jp/site/portal/shinsai-higaijokyo.html>
- 25) 尾田幸雄監修 横山利弘、藤永芳純 編著「心の教育」実践体系4 高校生の心の教育, 27, 日本図書センター, 1999, 9, 15
- 26) 前掲書15), 56-57
- 27) 前掲書16), 67-69
- 28) 中村安秀：トラウマ後の成長を引き出す心理社会的サポート, 日本小児科学会雑誌, 第117号 (6), 978-893, 2013, 6
- 29) 尾崎真奈美：心的外傷後の成長 (PTG) とスピリチュアルな発達：インクルーシブポジティブティの視点から, 相模女子大学紀要, C, 社会系75, 101-107, 2011

(2017年3月31日提出)

(2017年4月17日受理)

A qualitative study about an emotional process in 1 year later of the high school students who experienced an Great East Japan Earthquake

KITAMI, Kumi

Sukagawa special needs education school, Fukushima prefecture

NAKASHITA, Tomiko

Faculty of education, Saitama University

Abstract

With an Great East Japan Earthquake, it happened that Tokyo Electric Power Company Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant accident. X high school is located in Nakadori of Fukushima prefecture within 60 km from Tokyo Electric Power Company Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant, a lot of the school building were damaged or destroyed by the great earthquake. In addition, outdoor activity is restricted by radioactive contamination, students caused many problems in school life. Therefore, this study aimed to clarify about an emotional process in 1 year later of the high school students who experienced an Great East Japan Earthquake and nuclear accident. The target was Fukushima Public X High School 21 high school students, focus group - interview survey was conducted from March to April 2012, and analyzed by qualitative description method.

As a result, for each period of school life after an Great East Japan Earthquake, in stage I [Immediately after an Great East Japan Earthquake - Restarting School] was falling into 【Grief on persons and things that were instantly lost】 【shock to changes in the living environment after the disaster】, anxiety and fear etc. In stage II [Restarting school ~ summer vacation] was held 【empty feeling and frustration of school life by self-control of activities】 by the influence of nuclear accident. In stage III [summer vacation - 1 year later of an Great East Japan Earthquake] was seen 【anxiety for future course and life】 while being returning to normal, 【Supporting people and realizing the connection】, 【Thank you for your daily routine】 【Activities to actively overcome difficulties】. In stage IV [1 year later of an Great East Japan Earthquake] was revealed an emotional process of the high school students such as 【contribution to reconstruction】 etc.

Keywords: Grate East Japan Earthquake, high school student, 1year later, emotional process